柔道場完成!!

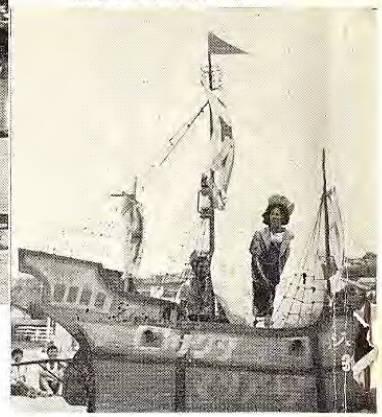
校友 16

松本深志高等学校生徒会

とんぼ祭

↑ あなたにおまかせネ

カランブスの卵 ↓



↑ 夜に浮かぶ記念塔

↑「そろそろおひげが…」
—アンネの日記より—

← 絵になる顔？

↓ フラダンサー

↓ 奇なり 二重の輪!!

↓ ここをこうしてこうやってネー

ウイーッ！ ↓

↑ 灯籠コンクール →

スポーツ用品

弘　貫　堂

松本市伊勢町通り

TEL (2)—0231

嶋　屋　商　店

深志高校東門前

TEL ③ 4062

ミクロの世界を写す
そこに詩があり、夢がある

科学写真　同好者の店

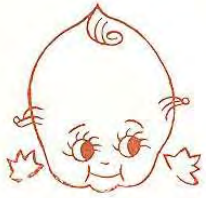
マブチ

フンドウチョウ TEL 3-2089

松本科学写真の会連絡所
松本自然を愛する会（M.N.L.C）

脳の栄養、疲労回復剤
試験勉強に

セレブロジン



各病医院処方調剤

松本市伊勢町
田多井薬局
TEL(2)0524 (3)1029

いつの時代も
パイオニアとして
事務の合理化に
活躍し続けて
150年……

学用文具
事務用品
事務機械
スチール家具

enhyo

遠兵

事務機センター　松本 大手 3—4
TEL 2—6350
本町店　松本本町 1—11
TEL 2—6353
長野営業所　長野三輪四ッ石
TEL 2—0821

学生の店

深志明倫堂
TEL②4980

読書と音楽

株式会社 鶴林堂書店
鶴林堂楽器
レコード販売部
鶴林堂ヤマハ
音楽教室
松本市大手3丁目3—2
電話（代表）2—5340

コンパの御用は
由上青果店
同窓会館上

校友十六号（通巻百六号）目次

表紙……小原　順

深志の将来に期待する……宮島逸郎（一）
試行錯誤……赤羽　誠（三）

あゆみ……編纂委員会（五）

随想

「闇魔の言葉」と「愛の思い出」……飯森真喜雄（二〇）
めまい……中内　均（二六）
私の神経症体験……藤岡　崇夫（三二）
無題……山下　利昭（三七）
紀行
日本海への旅……尾関　達（四一）
国道「一夜に」……塚田　和文（四三）

委員会だより……（一四）
峠の茶屋……編纂委員会（四六）

寄稿

カーストのこと……清水　和彦（五〇）
忘れ得ぬ人々……森下　太郎（五四）
若き先輩より……矢ヶ崎啓一郎（五八）
カブトエビの話……秋田　正人（六三）

特集

序……（六八）
学協の活動研究……（六八）
トンボ祭とクラブ活動との関連……（七一）

合同協議会回顧

学芸部……（七五）
運動部……（九一）

寸言集

卒業生……（一〇七）

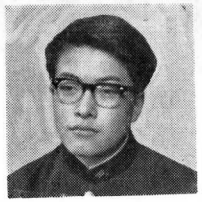
創作

旅立ち……田久保　尚（一一六）
雨……山岸　通育（一二三）
イッヒロオマン
——一人称小説——……聖池　仮名（一四三）

編集後記……（一五五）

深志の将来に期待する

生徒会長　宮島逸郎



「深志を憂う」などと、いかにも、もっともらしく深志高校を批判する意味の寄稿を読んだ事がある。たしかに深志の良からぬ点をできるだけ多くとり上げて追求することも必要なことであろう。しかし、そのことは、必要ではあるが、決して充分なことではない。憂う憂うと口先で並べたてることは、誰でも容易にできることである。又、それと全く同様なことであるが、「昔は良かった」という意味のことをただ回想だけするのも容易なことである。要するに僕の言わんとすることは、真の意味で深志をたいせつに思う気持があるのならば、軽々しく批判ばかり並べたてて、後のことは他人まかせという無責任な言動はできない、ということに尽きる。批判というものは、己の具体的構想、あるいは、それがないにしても、建設的方向を伴なうものでなければ、その価値は、ほとんどないであろう。このような僕の考えを持って、自分なりきに、これからの深志に大いに期待する、ということを述べていく。ここまで歩んできた我々の深志生徒会が、現在かかえている諸問題と、どのように取りくみ、これから先をどのように切り開いていったらよいか、ということに対して、我々深志生は、常に「前進的態度」でむかっていかなければならない。そしてそのためには頭の中だけで、いくらりっぱなことを考えていても、それだけでは何にもならないであろう。身近な事でよいから、どんな事でもよいから、実際に自分らの手で行なっていく、ということがたいせつなのではないだろうか。恵まれた機会を進んで自分のものにしていく迫力をもって深志生活を過していくことが望ましいと思う。ところで、在校生諸君にしっかりと認識してもらいたいことは、深志の自由についてである。というわけは、他校に見られないような、この深志の自由は、深志生が更に一層厳しい決意と自覚をもって、

行動していけば、それは更に拡がっていくだろうが、もしも、自由という意味を誤まって解釈して、言動における厳しさが失なわれるようなことがあれば、他の力によって、現在の自由さのわくが、どんなにせばめられることがあろうとも、それは全くやむを得ないことであろう。要するに、深志の自由は「信頼感」によってのみ保たれているわけである。深志生は、いざという時になれば、驚くべきファイトと熱意とをもって物事にぶつかっていく。その原因は、各自が底力を持っているからに違いない。しかし、底力も、絶えず努力をしていかなければ、弱まってしまうだろう。だから力に恵まれた深志生は、厳しい気迫をもって、絶えることのない努力を続けていけば、これからの深志は、ますます発展していくに違いない。どうか二年生、一年生諸君、後退することなく、前へ前へと進んで行っていただきたい。

試行錯誤

学校長　赤羽　誠

試行錯誤という言葉がある。辞書を引いてみると、「心理学上の学習様式の一つであって、本能・習慣などのままにやってみて、失敗を重ね、だんだん適応すること」という説明がついている。

具体的な一例を挙げれば、迷路をつくって入口に飢えた鼠をおき、出口に食物をおく。彼は食物を欲する本能的衝動からこの迷路を走り、いくつかの袋小路に突き当っては引き返し、失敗を重ねながら目的物に到達する。この行動も二回三回と反復練習させると、鼠は次第に間違った路に入ることがなくなって、短時間に目的を果すことが出来るようになるとのことである。

辞書的解釈は以上のようだが、さて、我々人間の生活の営みもこれに似てはいないだろうか。人間の一生はいろい

ろの問題を解決していくための連続の道程であるといってよいだろう。その歩みの中に、我々には鼠にはない考える力、洞察する力が与えられている。然しながら、我々はこの試行錯誤的な修練なしに、問題の解決や、そして進歩するということは期待できない。

恰も、米ソ両国が競っている人工衛生、月世界探知の実験にも、この相をみることができる。その衝にある人々は恐らく綿密な研究と計画の上に立ってのことだろうが、幾度も思わぬ失敗を重ね、そして一歩一歩成功に近づいていくという道程が然りである。いまも宇宙開発のために、過去の経験・資料を検討してあらゆる条件を計算し、材料を吟味していることであろう。

翻って、我々の日常生活においても、同様にこの試行錯誤的経験によって、考える力を一層鋭くし、次の問題解決に当って錯誤を冒すことを少くして、次第に熟練した思慮分別のある境地へと成長していくのではあるまいか。然しこの経験を幾度となく繰り返すには勇気と実行力が必要である。殊に君達のような若い世代においては、一度の試行で深い痛手を受けたり、まだ解決の余地があるのに全面的に否定して立ち上がれなくなったり、逃避してしまうことが往々にあるが、一度や二度の失敗にめげずによく考え反省し、勇気を振って立ち直ることこそ肝要なことではないか。

洋々としている前途に黒い幻影をみずからの手で投げかけるようなことなく、眼の前にたちふさがる障壁をいくたびでも乗り越えて行こう。世界の歴史に輝く人たちは勿論のこと、我々の周囲にあってささやかながらも明るい光をかかげてくれた人たちも、それぞれこの厳しい試練にうち克つために、涙ぐましい努力と忍耐を重ねた事実を、我々は忘れてはなるまい。

サッカー部インターハイ出場成る

第四十四回全国高等学校サッカー選手権大会は一月三日から大阪市の長居競技場で開催された。長野県予選信越地区予選を勝ち抜いて晴れの全国大会出場権を獲得した（五年振り3回目）我が松本深志チームは大会第一日一回戦第二試合で広島代表の強豪広島市立商業と対戦健闘及ばず五対〇で敗れて上位進出ならず退いた。

。北信越予選決勝（於松本県営サッカー場）

十一月二十一日

松本深志3（0—1、2—1、1—0、0—0）2松本県ケ丘

全国大会出場できた感激を現在三年生のA君は学級日誌にこう綴っている。

× × ×

俺は今この日記を書きながらこの二週間の苦しかった事、素晴らしかった事をしみじみと思い出している。

県大会で勝った。そして信越大会の出場権を得た。試合の直前になって主要メンバーの一人が骨髄炎で出場不可能になった。「こういう事態になった事は仕方がない。県代表として恥かしくない試合をやろう」俺と同時にクラブ全員がそうなって今までにないチームの団結力が生れた。しかしあせり、心配だった。それが精神的な負担となって夜も良く眠れなかった。十一月二十一日！来た！なんだか足がだるい。足の下の小川になにかひきつった様な顔が映っていた。気を落ちつかせた。延長五分ロングシュートが決った。三対二だ。勝った！大阪だ。みんなの顔はクシャクシャだ。本当に勝ったのだ。本当に……。熱いものが胸の底からグーッとこみあげてきた。これからもっと頑張ってそして大阪で。

。全国大会一回戦（於大阪市長居競技場）

広島市商5（2—0、3—0）0松本深志

毎日新聞社の御好意で記事を転載する。

広島		深志	
竹本	GK	内田	①
安藤	FB	天野沢	①②
山田	FB	吉屋	②②
加藤	HB	碇山	②②
山田	HB	丸出	②
船本	HB	小田	②
奥野	FW	杉村	②①
江田	FW	野子	①①
水口	FW	金田	②
岡本	FW	和城	②
井上	FW	宮	
4	GK	15	
8	GCK	0	
7	FPK	22	
1	GK	0	

（評）初出場ながら優勝候補にあげられている広島市商が、下馬評通りの線の太い運びで順当に松本深志を押し切った。

広島はノーストップパスが少なく、パスワークはさほど見ばえがしなかった。しかしパスそのものは理にかなっていたため、深志の防禦は後手に回ることが多く、受け身をしいられるあまり、深志は本来の力を出せずに終った。

前半5分、広島の船本がまさか打つまいと思った深志GKの虚をつき、20メートルのロングシュートをを決めたあたりは、ラッキーな感じがしないでもなかったが、この先取点を境にペースは一転、広島のものとなり、14分に右からのフリーキックを井上が決めたあと、後半にも2分は水口、7分は奥田が矢つぎばやに、クリーンシュートを決めて広島の勝利は確定した。深志はひところの信越勢に比べて足技もうまく、運びにもシンがとおっていた。緒戦の相手が広島のような強チームでなければ、もっと印象に残る活躍を残せたに違いない。

丸山さんを憶う

田村六太郎

丸山恒人君は、すばらしい人であった。小学校時代は、一年から首席で通した秀才である。普通学科ばかりでなく、音楽、体操、相撲、野球、何でもすぐれていた。小学校五年生（当時は高等小学校一年生）の時、お父さんに、逝去され、誠にお気の毒な境遇に立たれたが、賢いお母さんの、すぐれた指導と躾けとによって、天性の性格が、良く形成されて、独立独歩、いわゆる自立性に富んだ立派な性格になられたことと思う。松本中学校へ入学してから、自治団体である尚志社（寮には入らなかった）に出入して、先輩や同僚と交際するようになってからは、切瑳琢磨によって、心の鍛練につとめられたので、一層、根性のある人になられた訳けである。てきぱきして、元気があったが、どうかすると、早呑み込み過ぎた点もあったようだったが、すぐ反省して立ち直ることが出来て感心させられたものである。

卒業後、母校の小学校で代用教員を勤められたが、実業界に志し、当時の蚕糸王国片倉組に入社したが、洋々たる広い心と誠実さで厚く信任され、やがて抜擢されて責任者となり、大活躍された次第である。戦後は、自由の立場で各方面に活動されて、押しも押されもしない実業家であったことは誰知らぬものはない程であった。

ものごとに、こだわることなく、専心初志の貫徹に努力され、責任感は、人一倍強く、松中時代、柔道部を背負って首将として種々の面に配慮されたこと、又、困難な同窓会々長の職責を、多忙な身で、長い間、勤められたことでも判る。

風才は一寸、取りつきにくいように見えるが、一度話し合うと、座談に妙を得ていて相手をあきさせることなく、時間の経過を忘れさせてしまう。私達子供時代の仲間で同級会を毎年開くが、多忙な丸山さんは、何とか都合して、出席して、腕白時代の話を思い出して一人一人に話すので、皆喜んで聞いたり応対していて、其の座を一人占めにする程で、吾々も、それが楽しみの一つとして、その会に集まるくらいである。

去年の時は、都合で見えられず、今年を楽しみにしていたが、病気とのお話で、一同不安のうちにも、頑丈なからだの丸山さんのことだから、間もなく全快されるだらうといって快癒を祈った次第であった。

其の後、お宅へお伺いすると、脇にテレビを据えて、ベットで見ておられたが、私を見て大変喜ばれ、すぐ同級会の有様や、旧友の動静など聞かれ、長く寝ていて、いやになったから近いうちに床上げをしたいと、元気に話し声にも力があるので安心して、間もなく春になり暖かい陽気になることだから無理をしないで、ゆっくり静養するようにといって帰ったが、これが最後のお別れになるとは、夢にも思わなかった。

実際すばらしい人がなくなられて惜しいと思う。（筆者は三十四回卒業生で、丸山氏とは小学校以来の友人。〇丸山恒人氏は前同窓会長二月二十二日に病没された。）

新入生歓迎諸行事一斉に

新入生を迎えて生徒会、各部の歓迎会、説明会、勧誘会などが四月一斉に行なわれた。

四月四日対面式を皮切りに九日は音楽部による歓迎音楽会、十一日から恒例の応援練習、十九日運協勧誘会、二十一日花見、二十五日落語口演会、三十日第三十三回演劇公演、モリエール作「人間嫌い」の上演と続いた。今年は花見に二年生が都合で行けず、一年生は城山以外に行ったりなどちぐはぐな点がみられた。

また五月二十九日には映研主催の「太陽がいっぱい」の映写会が開明座において行なわれた。

深志生となって

一の九　赤羽美代子

四月二日、不安と希望とで胸をいっぱいにさせ私の深志での生活が始まった。そしてはや二学期が終ろうとしている。この四ヶ月間の生活それは私にとってまったく新しい事だらけだった。緊張の連続であった。その中でも私には忘れられないいくつかの事がある。

その一つとして「高校生活の自主性」ということがある。義務教育の過程を終えた私達には自分の責任の元での生活が待っていた。自分で考え、判断しそして自分の力でやりとげていく。そのために悩んだり、苦しんだりする。くふうもする。このことの尊さをつくづく感じた。深志の伝統的精神の一つとしてある「自治」という事にもつながりがあるだろう。「自治」その言葉の重みある響きに深志の姿が表われている気がする。それを理解することは私にとってあまりにもむずかしいことだった。しかしそれが理解のための一部であったとしても、いくつかの出来事を通して感じられた。例えば、部活動、生徒大会などである。自分で深志のいろいろなことに慣れながら「自治」を学びとっていきたい。

それともう一つ「先輩」ということである。郷友会や部活動を通じて二、三年生と話しをする機会も増えてきた。入学したころは、もう大人のような三年生にどきどきしていたのだが……。同級生だけとの付き合いにはない縦の関係が、私達に広い知識をもたせてくれる。中学校の頃にはなかった事だった。そして他の高校にはない深志の特色でもあろう。それだけに私達は先輩の指導や助言をありがたく思い又うれしく感じるのである。

このような生活面の他にやはり学生であるための学問についても考えさせられた。「厳しい」という事である。中間考査や期末考査からもそれをいやというほど知らされた。しかしその厳しい修練が深志生活での軸となっていることにも気がついた。学習との両立ができてこそ部活動などの楽しみが深いものとして味わえる気がする。むずかしいことだけにやりがいのあることと思う。

このようなことが今までの私の深志生活の上で強く感じたことである。無我夢中という様子で過ごしてしまった感じが強いだけに、自己を見つめるなどということもなく過ごしてしまった時期だった。高校時代にいろいろなことを知りたい。やりたい。そして吸収したい。こういう自分の欲望が無我夢中の中で少しずつ満たされて来たようだ。深志は私にすばらしい高校時代を与えてくれるような気がする。私自身の努力によって……。未知なものへの憧れを現在の位置を考えながら静かにみつめていきたい。

交歓会否決さる

昨年度から検討されてきた懸案の対清陵交歓会問題は月を重ねるに従って激しい論議がなされたが五月四日生徒大会において否決され本年度は中止となった。

一、二年生健闘す

夏期全校クラスマッチ

夏期全校クラスマッチは前日の雨でグランド状態が悪く開催を危ぶまれていたが運協各部の努力で予定通り七月九日（土）決行された。本年度はやはり三年生の優位は例年通りであったが、総合三位の二年二組を始め二年生の活躍が目立った。成績は次の通り。

総合			
1位	7組	(157)	
2位	2組	(155)	
3位	2組	(133)	
4位	3年	1組	18
5位	3年	2組	17
6位	3年	3組	16
7位	3年	4組	9
8位	3年	5組	2
9位	3年	6組	3
10位	3年	7組	3
11位	3年	8組	4
12位	3年	9組	3
13位	3年	10組	1
14位	3年	11組	3
15位	3年	12組	2
16位	3年	13組	1
17位	3年	14組	3
18位	3年	15組	3
19位	3年	16組	3
20位	3年	17組	3
21位	3年	18組	1
22位	3年	19組	3
23位	3年	20組	2
24位	〃	カーニバル	
25位	〃	ソーラン節	
26位	〃	ケース	
27位	〃	球技	
28位	〃	球技	
29位	〃	泳法	
30位	〃	伝統芸能	
31位	〃	撲技	
32位	〃	サバイバル	
33位	〃	卓球	
34位	〃	羽根突き	
35位	〃	水泳	
36位	〃	駅伝	
37位	〃	相撲	

三年生上位独占

合唱コンクール

恒例の合唱コンクールは七月二十日（水）十時半より一時半まで講堂で行なわれた。結果は予想通り三年生が上位を独占した。なお今年は十一位以下を発表しない事になった。

一位　3年8組　お母さんごめんなさい
二位　3年3組　山を憶う
三位　3年6組　母なるヴォルガを下りて
四位　3年7組　ドノコ沼
五位　3年9組　白い季節
六位　2年2組　富士山

野球部県大会で活躍

全国高等学校野球選手権大会出場権をかけた長野県大会に深志チームは中信予選で塩尻高校を五対二と下して出場し、力一杯のプレーで健闘上伊那農に大勝、余勢をかって二回戦上田と対するも惜しくも四対一で敗れた。

。一回戦（七月二十五日　長野市）

深　志	4	3	0	2	0	0	0	0	1	1	10
上伊那農	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	3

。二回戦（七月二十八日　長野市）

深　志	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	
上　田	1	0	1	1	0	0	1	0	X	4	

サッカー部初優勝なる

第2回北信越サッカー大会

第二回北信越サッカー選手権大会に県代表として出場した深志チームは丸岡・高岡工芸と他県勢を撃破し決勝に進出、ライバル県ケ丘と長野県勢同志の争いとなったが、延長の末堂々一対〇で破り初優勝を遂げた。

。決勝（7月24日　富山県高岡市伏木中グランド）

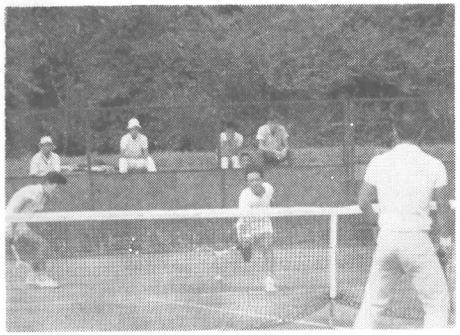
深　志　0——0
（長野）　0——0
　　1——0　0県ケ丘
　　0——0　（長野）

なお六月十九日に行なわれたインター杯長野県大会に於て決勝で県ケ丘と対戦二対三で敗れ、二年連続インター杯出場はならなかった。

全国大会へ

陸上部・硬庭部

インター杯全国大会は青森県を中心に七月下旬から八月上旬にかけて開かれたが、本年度深志高校からは硬式庭球部の男女団体、男子単複などと陸上部の千五百メートルリレー等の二つのクラブが参加した結果、いずれも緒戦で敗れ良い成績を得るには至らなかった。



AFS留学生

江口君、野田さん、永原さん

AFSアメリカ留学生試験に合格した深志高校三年一組江口信男君、野田たまさん、四組永原むつみさんの三名は八月三日堂路アメリカへ向った。それぞれの高校に別れて勉強をしているが三人の住所は左記の通りである

江口信男君カルフォルニア州モンロビア・グランドアヴェニュー。野田たまさんオハイオ州ホートクリントン。永原むつみさんイリノイ州ボンチァーク、ウエストリンカーンストリート。

トンボ祭を送る歌完成

国見先生の作詞された「トンボ祭を送る歌」の作曲募集は昨年度からされていたが、八月十九日（金）入選者の発表があり、三年一組野田たまさん（現在アメリカ留学中）の作品が選ばれた。この歌はさっそく校内放送や講習で全校友に示され、本年度トンボ祭から愛唱された。

トンボ祭を送る歌

作詞　国見金熊
作曲　野田たま

一、今宵いま祭の灯　消え果てし
暗き沈黙の　ひとときを
縁の友と　手をとりて
若き生命を　謳わんか

（一、二番とも以下三行目からの繰り返し）

二、いざやいざ迎えて送る　青春の
記念のうたげ　惜しみつつ
篝火囲み　うち集ひ
秋の長夜を　語らんか

六、七、八月の諸行事

六月八日（水）　一学年クラスマッチ
六月二十日（月）　三学年クラスマッチ
六月二十一日（火）　二学年クラスマッチ
六月二十三日（木）三学年集会
七月二十一日（木）一学期終業式
七月二十九日（金）大学特奨採用試験
八月十八日（木）　二学期始業式

投稿がたった三編。しかも二年生の女子のものは皆無。校友のための「校友」を目標に八方手を尽してみたのだが、今年もまた先生方・委員会編集記事に頼らざるを得なかった。残念である。校友誌は一般校友の投稿なしに立派なものはできないという事をどうか再認識して来年度こそこの無意味な言葉の繰り返しを終らせてくれ。下級生諸君、切に望む。

尚やむを得ない事ではあるが編集の都合上掲載できなかった作品が幾つか出た。紙面を借りておわびします。またアカシア会・写真提供者等陰ながら御協力頂いた校友諸君、藤岡、大貫両先生、本当にありがとうございました。長年の懸案だった「校友」の全員購入がやっと実現できた。来年度の発展を願ってペンをおく。

校友誌編纂委員

一年　池原　義明　袖山　健　山口　信貴　川上　雅久
　　太田　和博　嶼田　利夫　清水　正博　伊藤　勉
　　上島　裕人

二年　上条　秀徳　小松　芳郎　宮沢　直美　藤本まゆみ
　　和田　裕治　宮沢　温　藤岡　崇夫　上条　俊明
　　北村　節子

三年　与川　富信　沢木　真治　大森　健　臼意茂理男
　　村上　広志　小原　正　前沢　秀樹　布山　邦夫
　　関崎　和重　塚田　敏郎　江川　充　川窪　憲寿
　　田久保　尚

協力　矢彦みよし　岩垂美知子　顧問　藤岡　筑邨

校友第十六号（通巻百六号）

昭和四十一年十二月二十日印刷
昭和四十一年十二月二十五日発行　〔非売品〕

編集人　松本深志高校校友誌編纂委員会
編集責任者　前沢　秀樹
発行人　宮島　逸郎
発行所　松本深志高校生徒会
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
（松本市城西二丁目二ノ二二）